

聖書：ルカの福音書 13章 10～19節

説教：アブラハムの娘なのです

## 1 安息日

### 1) モーセの律法

14節で、会堂管理者と呼ばれる人が怒りながらこう言っています。「働いてよい日は六日です。その間に来て直してもらうがよい。安息日にはいけないのです。」会堂管理者は、安息日のことを問題にしているようです。何を怒っているのでしょうか。

そもそも安息日とは何でしょうか。初めて聞く方もいるでしょう。でも意外なところで私たちの生活に深く関係しています。安息日とは、ことばのとおりにお休みする日のことです。世の中では、例外は少しありますが、学校でも会社でも通常日曜日を休みとしています。当たり前のことと思うかもしれませんが、日本で日曜日に仕事を休む習慣ができたのは、明治時代と言われています。外国の習慣に合わせてなければいろいろと不都合なことが生じてきたこときっかけのようです。

ではなぜ日曜日を休みにしたのか。起源をさかのぼっていくとモーセが記したと言われる申命記5章12～14節にたどり着きます。

「安息日を守って、これを聖なる日とせよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならぬ。しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。—あなたも、あなたの息子、娘も、あなたの男奴隷や女奴隷も、あなたの牛、ろばも、あなたのどんな家畜も、またあなたの町囲みのうちにいる在留異国人も—そうすれば、あなたの男奴隷も、女奴隷も、あな

たと同じように休むことができる。」

モーセが神の命令として与えた十の戒めの中の四番目に出て来ます。

世の人たちは、あたりまえのこのように日曜日は休むものだと考えていますが、聖書のことなど知らなくても、多くの人たちはこのみことばのとおり生活しています。聖書の影響力は、決して小さくはないということがこのことからわかると思います。

### 2) 律法学者たちの規定

さて、安息日は休む日であるとわかりました。ではどうして会堂管理者が怒っているのか。次にそのことを見ましょう。会堂管理者とは、文字どおりに会堂を管理する人であり、ユダヤ教の指導者です。その会堂管理者が、安息日に病気を直してはいけないと言ってきます。皆さんはこれを聞いてどう思いますか。「えっ、ほんとうなの？」と驚くでしょう。日曜日に子どもが熱を出して救急病院に駆け込んだ、そういう経験をお持ちの方もいるでしょう。聖書では、それはいけないことなのか。これを聞いて疑問に思わない方はいないでしょう。

でも二千年前、イスラエルでは、堂々と日曜日には病気を直してはいけないと言われていたのです。どうしてそんなことがまかり通るのでしょうか。会堂管理者は、先ほど見た申命記のみことばのなかの、「どんな仕事もしてはならない」というところを根拠にしています。病気を直すことは労働である。仕事をする事だから、安息日には病気を直して

はならない。そういう論法です。

お医者さんは患者さんを診察することで報酬をもらうわけですから、確かに労働ということは言えるでしょう。では消防士や警察はどうなるのか。聖書に書かれてあるのだから、厳格に守らなければならない。もしそれを破ったなら、その人は神に対して大きな罪を犯すことになる。そういうことなのでしょうか。

## 2 イエス

### 1) イエスは律法を曲げたのか

結論から言えば、会堂管理者の言い分は間違っていました。イエスは十八年間腰が曲がり、不自由な生活を強いられていたひとりの女性を安息日にいやされました。

それはよいとして、では安息日の決まりはどうなるのでしょうか。イエスは神ですから、何をやってもよい。たとえ聖書で安息日には仕事をしてはならないとあっても、イエスは例外である。そういうことでしょうか。

でも聖書には、どんな箇所であっても例外と言うことはあり得ません。例外ではないというのなら、イエスはここで申命記のみことばを取り消して、何か新しいことを始められたのでしょうか。いいえそういうことでもありません。神ご自身が申命記で「安息日にはどんな仕事もしてはならない」と言われたのなら、イエスもそのみことばのとおりにされます。いったいどういうことでしょうか。

### 2) 「ほどく」と「束縛を解く」

15、16節を読みます。「偽善者たち。あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほどき、水を飲ませに連れて行くではありませんか。この女はアブラハムの娘なのです。そ

れを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけません。」

たとえ安息日ではあっても、牛やろばを小屋から水を飲ませに水飲み場に連れて行くことは、律法学者たちや会堂管理者も律法には違反しないと考えていました。イエスはそのことを取り上げ、15節で、「安息日に、牛やろばを小屋からほどき」と言っています。そして16節では「束縛を解く」と言っています。この「ほどく」ということばと、「束縛とを解く」ということば、実は同じことばを使っています。

つまりこう言いたいのです。「あなたがたは安息日であっても、牛やろばのつないでいる縄を解いて水を飲ませるではないですか。それなのに、どうしてアブラハムの娘は、安息日に束縛を解いてはいけないと言うのか。アブラハムの娘は、牛やろばよりも粗末に扱ってよいというのですか。」

アブラハムの娘とはだれのことかは後で触れますが、とにかく言いたいのは、人間は牛やろば以上に大切な存在ではないか。そういうことです。何も特殊なことは言っていない。実に当たり前のことを言っています。日曜日であろうとも、子どもが熱を出したなら病院に行くのは当然なのです。

そもそも神は、律法学者たちや会堂管理者のように、人々を縛って不自由にするために安息日の規定を語ったものではありません。その反対です。安息日は、私たちの重荷を軽くするために設けられたのです。

ところが人が、安息日の本当の意味をねじ曲げ、人が背負いきれないほど重いものに変えてしまいました。そんな人々に主は言われます。「偽善者たち。」

当時の律法学者や会堂管理者がおおまじめに主張したことは、今考えれば実にばかばかしく感じられます。でも、他人事ではないかもしれません。私たちも同じことをする可能性を抱えています。信仰が弱いから間違えるわけではありません。むしろ聖書を正しく守るべきだという熱心こそが、間違いを引き起こす可能性をはらんでいます。

### 3 真の安息日

#### 1) アブラハムの娘が見いだされる

次に、イエスが示された安息日の真の意味を確認します。三つのことを挙げる事ができます。

一つ目は「アブラハムの娘」という表現に着目します。この女性がアブラハムの血のつながった子孫だという意味ではありません。

神はかつてアブラハムにこのような約束をしていました。創世記15章5節。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。あなたの子孫はこのようになる。」

アブラハムはこのことばを信じて、義とされました。義とされたというのは、救いをいただいたということです。アブラハムの子孫とは、国籍とは、肌の色とか、そんなものは関係ない。神の救いをいただいた者がアブラハムの子孫である。そんなふうにして神の救いをいただく者はこの星の数のように数え切れないくらい増えていく。そういう約束です。今日のところで十八年間病んでいた病気をいやしていただいた女性もアブラハムの娘になりました。人が救われる日。それが安息日です。

#### 2) 解放される

安息日の二つ目の意味。12節のことばに象徴されています。「あなたの病気はいやされました。」直訳すれば、「あなたの病気が解放されました。」あるいは、「あなたの弱いところは、あなたから取り去られました。」と言うこともできます。私たちを苦しめていたもの、罪から私たちが解放される日。それが安息日です。

#### 3) 神の国の始まり

安息日の三つ目の意味。それは神の国と関係しています。19節で主は、神の国はからし種のようなものだとおっしゃいました。最初は小さくて目に見えないようなものだけれども、やがて生長していくと、鳥が巣を作るくらいの大きさにまでなる。からし種のことを知らない人は、まさかこんな小さなものが、そんなに大きくなるなど想像もできません。神の国はそれと同じだと言われます。

クリスチャン人口は少なく、教会も小さい。自分たちが世の中を変えることなどほとんど無理だ。どこかでそんなふうにあきらめています。けれども主はなんとおっしゃったか。私たちがアブラハムの息子、娘と呼ばれるようになったとき、神の国はどんどん大きく生長しているのだと言われます。たとえ最初はからし種のようなものであっても、落胆する必要はない。どんどん大きくなるので心配いらない。

このことに関して、「主を信じる者は、神の国のために働かなければならない。」そんな言い方がされることがあります。何となくそうかなと思います。でもよく考えてみたら、神の国はだれが大きくなるのですか。私たちの力ですか。主が大きくなってくださるのではありませんか。

今日の箇所をよく見てください。そもそも努力とか、がんばりとか、そんなものから解放して下さったのは主でははいですか。それでも足りないというのなら、主の十字架はまだ不十分だったというのでしょうか。決してそんなことはありません。

いったい主の十字架の恵みは、どこに注がれるのですか。私たちががんばりとか努力、強いところに注がれるのですか。見てください。この女性を。十八年間腰が曲がり、自由に動き回れなかった女性に恵みが注がれたではありません。

最後に確認します。イエスは安息日の律法を破ったのか、それとも廃止されたのか。どちらでもありません。安息日が与えられたのはいうまでもなく人間です。イエスは神のひとり子ですから、私たちが安息日に招く側に立っております。皮肉なことに、十八年間病んでいた女性を救うために働いたことがきっかけで安息日律法に違反したと言われ、後に十字架に追いやられることとなります。

私たちは安息日に休みます。でも神は私たちのためにいのちを捨てて安息日に働かれます。その日だけが安息日に招かれるのでしょうか。何もできないと悲しむ者こそが救われます。

主が定めて下さった安息日はそのような日であることを、もう一度覚えたいと思います。